

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の 教育



特集

緑蔭図書紹介

好評連載

子ども文化の詩学4

8

2009

保育に活かせるアンパンマン新シリーズ誕生

手づくりアンパンマンといっしょ③

エプロンシアター

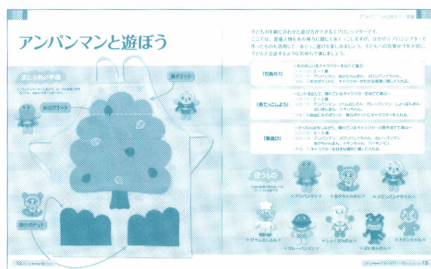
® 中谷真弓/著

子どもたちに大人気のアンパンマンを手づくり作品で楽しむ実技書の第3弾！
「ジャムおじさんの誕生日」「アンパンマンと遊ぼう」「だあれ？」「あてっこしよう」「数遊び」「みんなでカレーパーティー」「みんなでおかたづけ」など、乳児から幼児まで楽しめる遊びや生活習慣に役立つエプロンシアターを紹介しています。

26×21cm 80ページ 定価 1,995円(税込)



10903



わくわく☆おもちゃ



10901

島田明美・尾田芳子・チーム Yamy/著

26×21cm 88ページ 定価 1,995円(税込)

かんたん ギフト



10902

千金美穂・尾田芳子・あかまあきこ/著

26×21cm 80ページ 定価 1,995円(税込)

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第108巻 第8号



乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第108巻 第8号

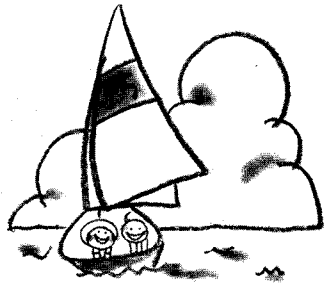
巻頭言

職員室の保育……

渡邊保博

4

もくじ



—特集— 緑蔭図書紹介

生活・平和・いのち

吉葉研司

8

『カラマーソフの兄弟』をめぐる父娘対話

石川雄・石川眞佐江

12

だいすき! の絵本たち

河野優子

16

『永遠のなかに生きる』を読んで

大島孝子

20

ぐるぐる・ももも たのしいね

山崎奈美

24

園長のまなごし第8回

かわいいかくれんぼ

松永克子 28

発達心理学者の子育て奮闘記⑧

トイレトレーニング

長田瑞恵 30

子ども文化の詩学④

遊び食への体験

森下みさ子 36

保育の中の物語⑧

ゆるやかな境界線

岸井慶子 42

「幼児の教育」ネット公開に寄せて⑧

『幼児の教育』を通してみる保育者の実践研究の歩み

小山みすえ 46

保育の現場から

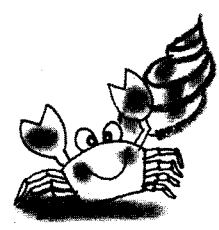
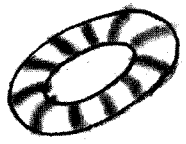
子どもたちの心に目を向けて

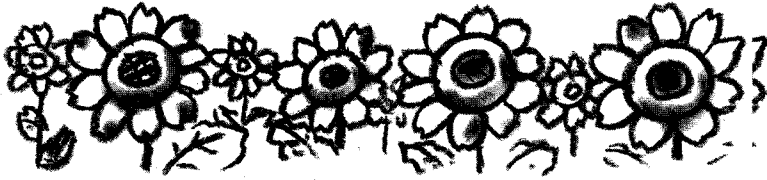
白石 肇 52

お茶の水女子大学「幼保大」連携保育研究の試み⑫

「わたしたち」のはすねっこ体験

菊地知子 58





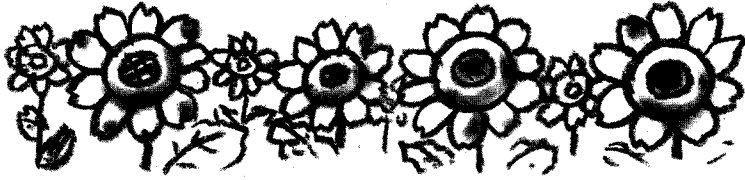
巻頭言

職員室の保育

渡邊保博

保育の一つの場として、職員室（事務所）に関心があります。以前、知り合いの保育園長に、その記録について質問したら、「職員室にやってくる子どもには対応しているけれど、そのまともはしていない」と言われてしまいました。同園の月々の「園だより」には、職員室で過ごす子ども姿が記録されることもあるのに、「まともではない」とはどういうことだろう、と考えてしまいました。でも、別の保育園長に、事務所は大事な保育の場だけれど、「事務所の保育」というような柱を立てて、保育のまともを行うようなことはしていない」と言われて、少し納得がきました。さらにもう一人の保育所長に、「子どもが事務所に来るのは当たり前のこと」「事務所の保育などと構えてまともは書きません」と言われ、ハッとしました。

つまり、三人の保育園（所）長が言いたかったのは、事務所の保育記録は「ない」

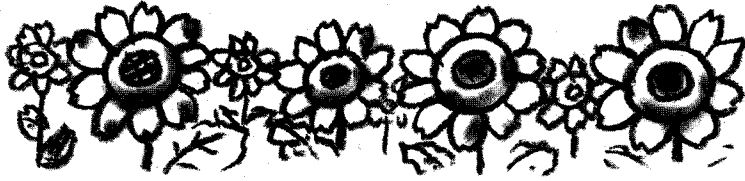


ということではないようです。事務所の保育記録はあるけれど、それは年齢・分野・課題別に省察・総括した保育のまとめのように「構えて」書いたものではない、というのでしょうか。もしそうだとしたら、そういう記録の背後にある事務所の保育の独特なありようが予想できません。

さて、近年の実践記録には、事務所で過ごす子どもたちの姿が紹介されています。その主な書き手は担任の保育士ではなく、保育所長・主任保育士・看護師・事務職員など、事務所で日々それぞれの業務を行う職員です。その記録によりながら、子どもたちが職員室（事務所）を利用してしている様子を見ましましょう。ここでは、大阪府堺市の、ある公立保育所の看護師が書いた所内研修用の記録の概要を紹介します。

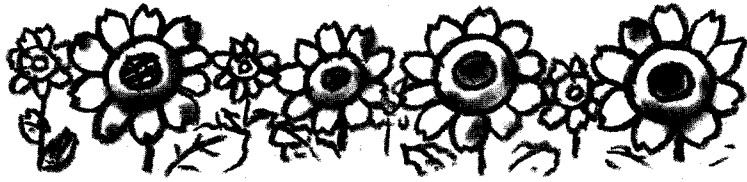
事務所の一角には、医療用戸棚・小児用ベッド・おもちゃ・絵本などが用意され、けがの処置を行ったり体調の悪い子が休んだり投薬を受けたりします。

出入口が二か所あるせいか、走って通り抜けたり、廊下の延長のように追いかけてっこをしたりして入ってくる子どもが多いのです。何をするわけでもなく、何を言うわけでもないのに、ふらりと入ってきて、あちこち眺めたり、机の上のものを触ったり、いすに座ったりクルクル回して遊んだりします。大人とのかかわりを求めてなのか、事務所に入りたいたいのか、入り口や窓からじっとこちらを見つめています。看護師と目が合うと、急に自分の体の小さな傷を探して訴えてきます。処置するほどではないのに、傷口はもう完全に治っているのに、何かをしてみらわないと



納得しない。水を含ませた綿花で拭いてもらうだけで、もう笑顔。友達のけがの付き添いと称して何人も一緒に来て、なかなかクラスに戻りたがらない。友達を見つけると「○○ちゃん、どうしたん？」と入ってきて、気がつけば十人以上が思い思いのことをして遊んでいます。

たたいた、たたかれた。かまれた、かんだ。そういう友達同士のささいなトラブルからの傷が多く、その処置や対応に明け暮れる毎日です。お薬を持ってきている子をうらやましがり、その子と一緒にやってきては、取り囲んで見ていたり、おしゃべりしたりしています。休み明けには「きのう、○○に行った」など、うれしそうに報告に來てくれます。設定保育中にふらりとやってくる子もいます。先日、三歳児クラスのAちゃんが、いつものようにパニックを起こし、その場から離れて冷静になれるようにと、事務所にやってきました。ちょうど給食の時間になったので、職員と一緒に食べることにしました。静かで落ち着いた中での食事がよかったのか、すぐに気持ちも穏やかにになり、家族で出かけた楽しい話などを、それははたくさん聞かせてくれ、その後、自分から部屋に戻っていききました。記録を読むと、子どもは何か目的をもつてではなく「用もないのに」やってくるようです。事務所はちょっとした遊びの場。気分転換やゆつくりする場。大人とかかわりおしゃべりを聞いてもらえる場。傷（と心）の手当をしたり、パニックを鎮め気持ちを立て直したりする場です。子どもによって意味合いは違いますが、どの子も安心



して自分が出せることを求めているようです。家庭の重荷を背負い、家庭にもクラスにも「身の置き場がない」子が事務所の机の下に潜り込んでいたりします。

この看護師は、子どもたちのこういう時間を大事にし、無理にクラスに戻そうとはしていません。でも、子どもが職員室に来るのを大げさに歓迎したり、クラスに戻るのを引き留めたりもしません。その来訪をあくまでも「当たり前のこと」として受け止めようとしています。この子たちが「今、ここに居ること」、その思いや気持ちに「共に共有する」ことを願っています。こういうかかわりは、ほかの職員の了解なしにできませんが、この看護師自身も、ほかの職員と協働して子どもたち一人ひとりを受け止める保育（と看護）のあり方を模索しているようです。

堺市の公立保育所の場合、事務所が一つの保育の場として浮かび上がってきたのは一九九〇年前後です。このころ、事務所で過ごす「気になる子ども」の姿が研修記録などに登場しています。こういう形で事務所の保育が可視化されるようになったのはなぜか。その時、保育に起こった転換について考えてみたいと思います。

（静岡大学教授）

注 こういう実状にもかかわらず、保育所（特に、満二歳以上の幼児を入所させる保育所）では職員

室（事務所）・保健室、所長・看護師は必置ではありません。幼稚園では、職員室・保健室及び

園長職は必置ですが、養護教諭は必置ではありません（児童福祉施設最低基準第三二条・第三三

条、幼稚園設置基準第五条・第九条参照）。

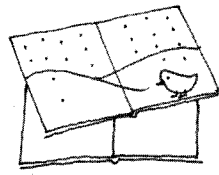
特集

緑蔭図書紹介

生活・平和・いのち

— 沖縄からの本の紹介 —

吉葉研司



那覇から船で一時間ほどの所に渡嘉敷島がある。

しそれはハブに注意しなくてはならない季節だ。

この島の阿波連小学校を舞台にした、灰谷健次郎の

「ヤマモモの実が赤くなつてくると、ぼくらは

絵本が「先生はシマンチュ一年生」(灰谷健次郎文

ハブに気をつけます」

坪谷令子絵 童心社 二〇〇三年 現在重版未定)

「うん? ヤマモモの実をたべるの? ハブが」

だ。「シマンチュ(島人)」は、灰谷の言葉を借りれ

たべない、たべないと、みな、わらいながら 口

ば、「島でくらしして島の友達を大事にしている人」

ぐちにいった。

のこと。関西から来た教師と島の子どものふれ

「ヤマモモの実をたべにくるトリを、ハブがなら

あいを活き活きと描いている。

うんです」

四月、渡嘉敷島はヤマモモの実がなる季節、しか

「ほう」

「下から見て、くろぐろとしたものが 目には
いったら、それは ハブが木の上で、とぐるを
まいていると思つたらいい」(十六頁)

渡嘉敷で生活している子どもたちからすれば、ハ
ブは敵視するものではない。その気のつけ方は渡嘉
敷で息づいた生活の知恵から学んでいく。これを生
きる力と呼ぶのであれば、学校の先生ですら、その
地域で、一から学び直さなければならぬ。

この絵本では、人がさまざま自然とかわり、
島の人々とかかわりながら生活することを「生活の
豊かさ」ととらえているようだ。この生活の豊かさ
が子どもたちの知的好奇心をくすぐり始める。

「海には、ふしぎが いっぱいある。カヤをつつ
てねる魚がいるけど、しつてる？」

先生は、また、きいた。

「はい」

ぼくは手を上げた。……(中略)

「アオブダイは、口から、ねばねばのえきを出し
て、じぶんのからだをつつむ ふくろを つくる
ねん。そこへはいつて ねてる」

「きみは、それを見た？」

「うん。おじいちゃんと どんとうもぐりにいっ
て、見た」……(中略)

「すごいなあ」

先生は、ぎゅぎゅぎゅと、ぼくを見た。(三十
頁)

生活の豊かさから立ち上がる知的好奇心、その好
奇心の中で出会う

「ぼく」と「先生」、

真の学びの中ではぐ
くまれる人間関係の
豊かさ、生活から学
びを立ち上げるこ
と、子どもの生きる



今を大切にすること……。渡嘉敷島に移り住み、シマンチュ一年生から始めた灰谷氏自身の想いが、そこに描かれている。

渡嘉敷島にある、渡嘉敷幼稚園の新垣光枝教頭は一九七四年の開園当初から、渡嘉敷幼稚園で地元の幼児の成長をみつめてきた。いわば、渡嘉敷のお母さんだ。先生の縁者は渡嘉敷島の集団自決を経験している。「生き残った人々がいなければ、私はここに居なかつたのです」、先生の言葉が胸に刺さる。

渡嘉敷で起きた戦争の歴史を、平和のために風化させてはならないと、光枝先生は、園児と共に、島に在住する集団自決で生き残った方々から戦争体験を聞き取る取り組みを続けてきた。重く口を閉ざしてきた島の方々も、時を経て、光枝先生と子どもたちの前で語り始めた。島で共に生活してきた娘のような光枝先生の前だからこそ語れたのだろう。

この体験談をもとに、子どもたちが感想画として

絵を描き、

『慰霊の日

せんそうのこ

と』という手

作り絵本を

作ったのが

十二年前、以後、年に一冊ずつ、十三冊の絵本が作られている。出版はされていないが、渡嘉敷幼稚園の本棚に置かれている。光枝先生は二〇〇九年三月をもってその三十五年の教員生活を終えた。

光枝先生の「私が生きている」という言葉は沖縄の人々の共通の言葉であろう。『いのちのまつり「ヌチヌグスージ」』（草場一壽作 平安座資尚絵 サンマーク出版 二〇〇四年）は、沖縄に根付く、命のつながりを題材にした絵本だ。「ぼうやにいのちをくれた人は誰ね？」、男の子がオバアに聞かれて考え始める。





で広がっている。そしてそのつながりが一つでも欠けると「ぼく」は存在しない。「悠久の時の流れの中、広大な無辺な生命のつながりが今ここにあり」。「命どう宝」と

「ぼくにいのちをくれた人、2人」
「お父さんとお母さんにいのちをくれた人、4人」……（中略）
「そのまた上に……」（十九頁）

さて、どのくらいの数になるのだろうか？ オバアが答える。

「オバアにわかるのは、数えきれないご先祖さまが誰ひとり欠けても、ぼうやは生まれてこなかった、と言うことさあ〜」（二十二頁）

膨大ないのちの数が、「ぼく」の目の前に地続きで広がっている。そしてそのつながりが一つでも欠けると「ぼく」は存

いう命を大切にする思想や、沖縄の祖先崇拜という思想は、あの戦争体験を経て輝きを増す。

そして、沖縄の、今、ここにある話。「家でわらべ唄を歌うと、子どもが『悪い』言葉（方言）を覚えてしまう」と、口を閉じ、わらべ唄を歌えなかったオジイやオバアが沖縄には居る。介護体験で「同じ土地で生きてきたオバアの言葉がわからない」と涙した学生が沖縄には居る。そこに標準化を押し進める学力対策の弊害がある。それは沖縄の人々から生きる力を奪ってはいないのか。「根を育てる」という久保田浩^{注2}の言葉をかみしめながら、そんな思いと日々格闘している。（琉球大学教育学部准教授）

1 注 一九九六年〜二〇〇九年（各年発行 未出版）

なお、沖縄では沖縄戦終結の六月二十三日を「慰霊の日」と県全体で位置づけ、沖縄戦で犠牲となった人々の魂を慰め、反戦平和を訴えている。

2 「遊びの誕生」や「根を育てる思想」などの著作で幼児期と遊びの重要性を問題提起した教育研究者。

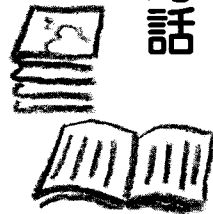
特集

緑蔭図書紹介

『カラマーゾフの兄弟』をめぐる父娘対話

石川 雄一(父)

石川眞佐江(娘)



父：僕は高二の時『罪と罰』に続いて『カラマーゾフの兄弟』に挑んだが、小説をストーリー展開の軽さと心地よさで楽しむ世俗的な人間にとっては、この長編は手に負えず、あえなく第二巻でリタイアした。五十年近くたって、亀山新訳の文庫本第一〜五巻(F・ドストエフスキー作 亀山郁夫訳 光文社

二〇〇六―七年)に再チャレンジした。宗教的対話が中心の第二巻でまたギブアップしたくなったが、何とか読破した。

娘：私も子ども時代読みかけて途中で挫折した。約

十五年の月日を経て、亀山新訳のおかげでついに読破することができた。成長してから、昔読んだ作品を読み返すというのもまた楽しい作業だ。以前感じられなかったことをそこに見出す。と同時に、子ども時代に感じたことを、もはや感じられない自分にも気づく。

父：ドストエフスキー(一八二一―一八八二)は異常な時代(帝政ロシア末期、社会主義の勃興とテロ頻発)に異常な体験(十八歳で父親が農奴に殺害される。二十八歳の時、社会主義運動で死刑宣告を受

け、銃殺直前に減刑され、四年間シベリアに流刑された)をした作家だ。

『カラマーゾフの兄弟』は彼の最後の作品(一八七九—一八〇)で、この長編は地主の家族における三日間の出来事、そして魂のダイテールを描いている。展開は極めてスローで、語り口も冗漫だ。しかしこの時間と空間の集中性、すなわち一瞬に一生以上の深い意味があるようだ。

見かけのテーマは父親殺しをめぐるミステリー、しかしその真実は亀山によると、ロシアの歴史が抱える矛盾と悲劇性ということだ。主な登場人物はカラマーゾフ家の父、長男、次男、三男、そして腹違いの子とされる下男、そして子どもたち全員が心のどこかで父の死を望んでいる。ドストエフスキーがかつて自分の父の死を望んでいたように。

キリスト教(ロシア正教)に基づく深い思索で「生と死」「神と子」「パンと石」、精神の自由の問題

を徹底的に検証し、神、自由、自然の力について登場人物に語らせている。

娘：ドストエフスキーが生きた時代には、作曲家P・チャイコフスキー(一八四〇—一八九三)がいたが、彼が描くロシアにはチャイコフスキーのようなロマン的な感傷性はほとんどない。

訳者の亀山によれば、ドストエフスキーと作曲家D・シヨスタコーヴィチ(一九〇六—一九七五)には、相通じるものがあるという。しかし、私がドストエフスキー作品を読む時、M・ムソルグスキー(一八三九—一八八一)を思う。ムソルグスキーは幼少期、母親からピアノの手ほどきを受け、十歳になるとペテルブルグの軍学校に入学し音楽教師のもとでピアノを学んだ。これ以降、正規の音楽教育を受けたことは生涯なく、彼は絶えず自己の音楽上の訓練の欠落への不安に悩まされたという。その後、近衛士官学校を経て近衛旅団に配属され、のちに

『ロシア五人組』で共にするポロディン、バラキレフ、キユイなどに出会う。軍隊を離れた後、作曲に専念するようになるが、そのころから神経を患うようになり、神経の過労からくる抑うつ、倦怠などの症状に悩まされた。さらに、二十六歳の時に母親を亡くしてからアルコールに強く依存するようになり、一八七七年ごろから神経性の熱病や不眠症、うつ病などが悪化し、一八八一年に死去した。

ムソルグスキーと言えば、組曲《展覧会の絵》(二八七四)が知られている。大学院時代、この組曲に取り組んでいた私に、師匠のピアノリスト、青柳晋先生は「チャイコフスキーはトルストイだけど、ムソルグスキーはドストエフスキーだよ」と言った。そのとき、昔読んだL・トルストイの『戦争と平和』(一八六三—六九)『アンナ・カレーニナ』(一八七三—七七)そして、ドストエフスキーの『罪と罰』(一八六六)『白痴』(一八六八)の記憶

と、これまで聴き、演奏したチャイコフスキーの音楽、そして当時格闘していたムソルグスキーの音楽とが線でつながった。誤解を恐れずに言えば、トルストイの作品に流れるロマン的な哀愁、愛や生の賛美と、チャイコフスキーの音楽には共通点があるように思う。

父：名門の貴族の家に生まれ、貴族の目を通してロシア社会の変動を描いたトルストイと、死刑宣告、シベリア流刑、転向という異常な体験から、人間の生の根底にあるものを描いたドストエフスキーとの対比と重なってくる。

娘：ムソルグスキーの音楽は、人間の底辺をえぐるような土臭さに満ちている。この組曲は、当時のロシア社会の暗部や人間の姿を風刺しているかのようだ。有名なラヴェル編曲のオーケストラ版《展覧会の絵》はフランス的で瀟洒な、色彩感覚に満ちたものに変化を遂げているが、原曲のピアノ独奏版《展

《展覧会の絵》は、もつと暴力的で原初的な筆致の楽曲だ。たたきつけるような和音、深くえぐるような音使い、人間の最も深く、汚く、罪深い部分や社会の底辺でうごめく人々の悲哀、慟哭、恨みをも感じさせる。

父：修道僧である三男のアリョーシヤの信仰の揺らぎを克服する大地の力、すなわち死の力を克服する力がロシアの大地にあること（自分の魂の中の大地）、白い雪に覆われた土が、その生命力を取り戻す自然の力でよみがえりを果たすシーン、そしてアリョーシヤを取り巻く子どもたちが「カラマーゾフ万歳！」と叫ぶ最後のシーンも極めて印象的だ。

娘：《展覧会の絵》の最終曲「キエフの大門」は人間の創造物である建築物を描いているはずなのに、そこに感じられるのは、人間の悲哀も喜びも争いのみ込み、すべてを超越して未来永劫、ただそこにあるロシアの大地を象徴しているかのようである。

人間の弱さを拒むのでも、許すのでもない。人間の営みにかかわりなく、変わり得ずそこに「在る」ものへの畏敬と、歴史の深さ、大地の雄大さ、世界の広さを感じさせる。『カラマーゾフの兄弟』のラストシーンとどこか重なってならない。

父：さて亀山新訳が驚異的なベストセラーとなった。今なぜドストエフスキーなのか、当時の混沌のロシアが今のロシア、いやグローバルゼーションの世界に通じているためか。プーチンのロシアでは共産主義の代わりとして、ロシア正教が庶民の帰属心、愛国心の源泉となつている。自分の生き方に確たる自信を失いつつある時代に生きる人にとって、神は大きな意味をもっているようだ。

ドストエフスキーは「信仰は大きな疑いを通してえられるもの」と言っているが……。

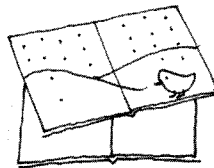
（石川雄一 横浜国立大学留学生センター元教授・石川眞佐江 静岡大学教育学部助教）

特集

緑蔭図書紹介

だいすき！ の絵本たち

河野 優子



梨木香歩に『家守綺譚』という作品があります。

冒頭で、主人公の青年はスイカを片手に「ミンミンゼミが降るように鳴く緑蔭の道を通り」亡き友人の実家に向かいます。そこは、木々が生命をもち、掛け軸から亡き友人が現れる不思議の世界です。夏の日盛りにそこだけ涼やかな緑の木蔭は、あたかも、私たちが不思議の世界に誘う特別な空間のように思われます。さあ、私も緑の木蔭の道を通って、大好きな絵本たちに会いに行きましょう。

最初に読みたい絵本は『わたしとなかよし』（ナシシー・カールソン作 なかがわちひろ訳 瑞雲舎 二〇〇七年）。「わたし」が大好きなこぶたちちゃんのお話です。こぶたちちゃんは、自分のまんまるおなかも、くるくるしっぽも、それに小さな足も、みんな大好きです。大好きな「わたし」を大切にしたいから、歯磨きもちゃんとするし、お風呂も入ります。食べ物の好き嫌いも言いません。どんな時もくじけずに「大丈夫、大丈夫」「きつとうまくいく！」と

自分を励まします。

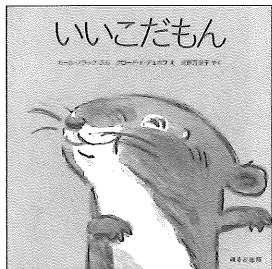


この本の原題は「I like me」、ストレートな表現は、潔くさえ感じられます。今、自分を好きになれない子どもが増えていると言われます。胸の痛むこととです。自分を好きでいられることは、「わたしがわたしであること」の第一歩であるはずなのに。小学校・中学校・高校と進むにつれ、子どもたちを取り巻くさまざまなことは複雑になり、上手にバランスをとって生きるのは、本当に大変だなあと感じます。戸惑ったり、方向を見失ったり、時に前を向きたくなくなったり……。そんな時に、「わたしがだいすき！」と考える自分があることはきつと力になると思うのです。子どもたちがみんな、こぶたちちゃんのようにまるごとの自

分を受け入れて、「わたし」が大好き、と思えたらいいのと思います。

次に、ロラというかわいいハムスターの出てる絵本のシリーズをご紹介します。カール・ノラックの描くハムスターのロラの愛らしさには、「わたし」への信頼感を感じます。ロラは、どんな時も『いいこだもん』（カール・ノラック文 クロド・K・デュボワ絵 河野万里子訳 ほるぷ出版 二〇〇二年）と自分にとっても肯定的です。きつと、ママがいつも「いいこね」と語りかけてくれるからでしょう。そんなロラの心には、「すてきなことば」が自然にあふれてきます。

『だいすききつていいたくて』（同一九九八年）は「すてきなことば」＝「大好き」を大切に心に





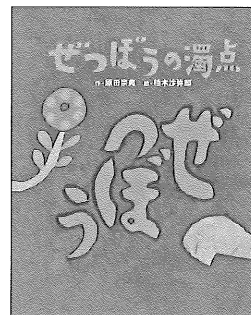
抱いて伝えようとするロラのお話です。「大好き」という言葉を胸に抱えていられることは、なんて幸せなことでしょうか。そして、その言葉を伝えたい相手がいること

のうれしき、伝えることができた時の喜びの、なんと大きなことでしょうか。ロラの素直な表現は、言葉に生命を吹き込むのは「伝えたい」という気持ちであることを教えてくれます。そして表現の仕方、伝え方に、その人らしさがあらわれるのです。ロラのように、伝えたい言葉が心にあって、大切に伝えたい相手がいって、伝えることができたなら、本当に素敵だと思います。そしてまた「大好き」と伝えられたパパとママの、なんとも幸せそうな様子。「大好き」という気持ちを受け取ってもらえること、うれし

いよと言ってもらえることは、子どもにとって幸せなコミュニケーションーション体験に違いありません。最後のページで「あし

たのすてきなことば」は、キラキラと光ってロラを包み込んでいます。ロラの心に寄り添った「だいきすきっていいたくて」という邦題にも心惹かれますが、明日への予感を秘めたこの結びに、ほっこりとした気持ちで本を閉じることができます。

「言葉」といえば、ひらがなの国に寄り道をして、ちよつとユニークな絵本『ぜつぼうの濁点』（原田宗典作 柚木沙弥郎絵 教育画劇 二〇〇六年）を読んでみましょう。これは「ゆめうつつ草紙」（原田宗典著 幻冬舎 一九九九年）が初出ですが、加筆修正して、絵本化した作品です。『ぜつぼうの濁





点」とは「ぜ」の文字についている濁点のこと。一途に主の「ぜつぼう」を思いやる、けなげな濁点です。絶望も、きちんと向き合って心を尽くせば、いつか希望の光が射してくる——原作の面白さが、絵本ではより魅力的に表現されていて、なんだか「絵本のチカラ」のようなものを感じます。途中でクスリ、おしまいにニッコリしたくなる絵本です。

最後の「大好き」の絵本は、『ルリユールおじさん』（いせひでこ作 理論社 二〇〇六年）です。ソフィーは木が大好きな女の子。ある日大切にしていた植物図鑑がバラバラに。どうしてもその本を直したいと願って、一人のルリユール (Lully 製本職人) と出会います。彼は、やはりルリユールであった父親のように、「私も魔法の手を持たただろうか」と自分に問いながら、ソフィー

の本に再び命を吹き込みます。表紙はソフィーの一番好きな、そして、彼にとっては父の思い出につながるアカシアの木の絵。タイトルはARBRES de SOPHIE (ソフィーの木たち)。じっと見入るソフィーの後ろ姿からは、彼女の心の震えが伝わってくるようです。木への、その本への、思いの深さを感じます。大人になったソフィーは植物学者への道を歩みます。きっと、彼女は人生の岐路に立った時、何度も何度もこの本のページを繰ったことでしょう。「木が大好き」という気持ちと、向かい合ったことでしょう。そんなソフィーの姿に、「大好き」という気持ちは自分がどう生きていくのかを考える原点になるのかもしれないと感じます。子どもたちが、ソフィーのように「大好き」になれる何かを見つげられることを願って、絵本の世界から帰ってくることにしましょう。

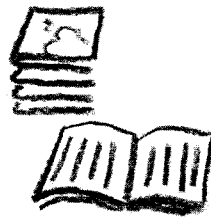
(立教女学院短期大学非常勤講師)

特集

緑蔭図書紹介

『永遠のなかに生きる』を読んで

大畠孝子



著者は、生命科学者として歩む中、一九六九年、原因不明の難病となり、闘病生活の中で、サイエンライターとして著作活動を続けておられる柳澤桂子さんです。毎月決まって起きる激しい嘔吐などにより、一週間は起き上がることもできず、難病とわかるまでには、自分を責め続けたこともあったということです。その闘病をテーマにしたテレビのドキュメンタリー番組の中で、苦しさの中でも美しく生活しているありように、尊敬の念を抱きました。

特に印象に残っているのは、「闘病生活の中で、

台所に立ち、食器を洗い、かごの中にどのように置いていくかを考える営みに幸せを感じる」ということを語られた場面でした。私たちは、日ごろ健康に暮らしている時には、日常の中にたくさん埋もれている幸せに気づくことができません。このことは、子どもたちと共に保育の現場で生活している大人たちも、日常の中の事象について、子どもたちと喜び、共感することがたくさんあるということを思い出させてくれました。

さて、著者は、これまでたくさんさんの文章を書き、

読者から戻ってくる愛読者カードを通して、そこから学び、生命科学についてのメッセージをよりわかりやすく発信し続けています。

著作の中から『永遠のなかに生きる』（柳澤桂子 著 集英社 二〇〇六年）を選んでみました。保育につながる視点で読んでいくと、何か心が広がり、神聖な気持ちになりました。三つの視点から、本書の内容を見ていくことにします。

まず、一つには、「子どもたち一人一人のかけがえないいのちについて」です。著者は、「生命の歴史は死の歴史」であると解き明かしています。そして地球上に生命が誕生して、生き残っている生物種はごく一部であると語っています。原核生物、寄生生物の中に見る能動的な死、やがて、光合成をする生物が現れ、地球上の酸素が増え、酸素を使って効率よくエネルギーを獲得する細菌が出現して、その細菌と共生した細胞から、人間は生まれたと考え

られているそうです。そして、生命の誕生後現れた真核生物から、人間は進化してきており、その後、多細胞の生物が生まれ、細胞間での役割分担が行われ、生殖細胞と体細胞が分化し、体細胞の行きつくところは死であるとながっています。

「私たちの個体の寿命は、受精の瞬間から時を刻みはじめます。産声をあげる一〇カ月も前から、私たちは死に向けてすでに歩みはじめるのです。しかし、その歩みは、はじめから崩壊に向かっていくものではありません。一個の受精卵は六〇兆個の細胞が増え、人間という小さな宇宙を形成していきます。

脳が発達すると喜怒哀楽を感じ、考え、学習をします。自意識と無の概念は死へのおそれを生みますが、死への歩みは、成熟、完成へと向かう歩みでもあります。一〇〇年に満たない死への歩みの中には、自分自身を高める余地が残されています。

す」(四十八頁)

「生命の歴史の中では、生と死はおなじ価値をもっています。(中略)生命の歴史の中に編み込まれた死を避けることはできないし、それを避けてはならないものです。(中略)死を否定することとは生をも否定することになります」(五十頁)

保育にかかわる大人たちは、一人ひとりの子どもたちの命の尊さをとらえ、かかわっていかなければなりません。そのありようが、いのちの教育にもつながっていくものと考えてもよいのではないでしょうか。さらに、著者は次のように述べています。

「いのちには四〇億年の歴史の重みがあり、一〇〇年の意識の重みがあります。その人を取り巻く多くの人々によって共有されるものでもありません。死は生命の歴史とともに、民族の歴史、家系の歴史、家族の歴史、個人の歴史すべてを包含するものです」(五十四頁)

二点目は、「感動することの大切さ」です。日常

生活の中で「驚くことの大切さ」といつてもよいでしょう。著者は、「感動の大切さ」の中で、中学一年生ぐらいのときに伯母様より愛読した本をいただき、抱きしめたいほど素晴らしい贈り物であったと書いています。偶然にも、著者自身が愛読していた「若草物語」の本と同じ内容の「四人姉妹」という本であったのですが、伯母様の愛読した本であることがうれしかったと書かれています。著者にとって伯母様はあこがれの人であったということです。

「戦後で、若草物語のようなぜいたくはできなかったのですが、三女のエミーが洗濯物をきちんと畳んで、きれいにタンスの引き出しに入れるなどというようなところは、すぐにまねをして、タンスの中を整理しました(中略)人は愛情あふれる物語や哀しい話に感動し涙します。人間味あふれる事柄に温かさを感じ、心地よさをおぼえま

す。時代や人種を超えて残る文学や映画はわれわれ人類の文化的財産といえるでしょう。感動は私たちの人生を豊かにしてくれます」(百十四～五頁)と結んでいます。

三点目は、「人へのかかわりに喜びを感じることを大切さ」です。「慈悲の遺伝子」というテーマで書かれた文の中で、

「人類は他の人のために尽くすことに喜びを感じ、そのような行いを善とする性格傾向をもって、私は信じています(中略)私が病気で動けなくなったときに、一番辛かったことは、人になにかをしてあげられないことでした。逆にいえば、人になにかをしてあげて、喜ばれることがなによりもうれしいということです。この喜びは、私だけにとどまらず、多くの人に共通しています(中略)私たちは、自己中心性を超越して、他人のために尽くすことに喜びを感じるよう成熟しつ

つあるものだ」(百三十四～五頁)と述懐しています。

本書は、著者の大好きな日本画家福井爽人氏の、二十二枚の絵を入れて編集されています。著者が本書の「音楽と文字」の中で「一冊の本もまたページとページの間にたくさん感情を含んでいます」と書かれているように、そのことを、目に見える形で実践したといえるでしょう。あとがきには、

「皆様に少しでも楽しく読んでいただくために、この本にたくさん絵を入れたいと思いました。きれいな絵で飾ったら、どんなにすてきだろうと考えました」とありました。

本書は、今保育者に必要とされる「大きな宇宙の視点」と「人間の生命の尊厳へのまなざし」そして「日常生活の中に主題を見つけること」を思い起こさせてくれると考ええます。

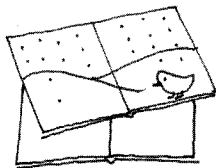
(茨城キリスト教大学教授)

特集

緑蔭図書紹介

ぐるぐる・もぐもぐ
たのしいね

山崎 奈美



三歳児の周りには、たくさん音があります。その音は、子どもたちの心を動かし、思わずやってみたくなる不思議な力をもっています。

「とんとんとん」

砂でいっぱいになったバケツを片付ける時の音。

子どもたちがひとしきり砂場で遊んだ後、砂が

入っているバケツを、そのまま片付けようとしていました。

保育者が「とんとんとん」と砂場のへりで砂を落としてみせると、子どもたちはくぎづけになってその様子を見ていました。

繰り返しやっているうちに、子どもたちも同じように「とんとんとん」と砂を落とし始めました。

「良い音だね」

「わたしの良い音だよ」

と言いながら、音を楽しんだことがありました。

「くるくるくる」

自分のタオルを丸める時の音。

タオルを自分のカバンにしまう時は、「くるくるくる」と呪文を唱えます。すると、できないという子も、あつという間に丸めます。三歳児は音と仲良しだなと思います。

このように音と体が響き合いやすい三歳児は、まか不思議な音が並んだ絵本も、全身で面白いと感じるのでしよう、読み聞かせの後、その不思議な世界を楽しんだことがあります。

◆ 『きたきたうずまき』

『きたきたうずまき』(元永定正作 福音館書店)

(二〇〇五年)は、いろいろな色や形のうずまきがたくさん出てくる絵本です。

絵本を読んだ後、子どもたちと一緒にうずまきになって動いてみることにしました。保育者が「ぐるぐる」と言いながら、手を広げて回り始めると、Aちゃんが同じように、「ぐるぐる」と回り始めました。それを見たBちゃんは、びよんびよん跳び始めました。楽しい雰囲気につられ、三人、四人と人数が増え、中には、保育室を走り回る子もいました。「くるくるぐるぐる」という保育者の言葉を聞きながら、喜々として体を動かして楽しんでいた子どもたち。

ところが、突然泣き声
が保育室に響きました。
動きが大きくなりすぎ
て、子ども同士がぶつか
り始めたのです。泣いて



いる子をながさめながら、そろそろこの活動を終わりにしようと思つた時でした。ふと振り向くと、子ども同士で手をつなぎ、楽しそうに回つていたので、それを見た子どもたちも、同じように手をつないで回り始めました。泣いていた子も輪に入ると、笑顔が戻りました。

思わぬ姿に保育者はびっくりしてしまいました。これまで、手をつないで遊ぶような姿は見られなかつたからです。「ぐるぐる」は友達と手をつなぐ魔法の音になりました。

◆ 『も』 『も』 『も』 『も』

『もこ もこもこ』（谷川俊太郎作 元永定正絵 文研出版 一九七七年）は、不思議な物体がもこつと地面のようなどころから出てきたり、膨らんだり、はじけたり、なくなったかと思つたら、またもこつと出てくる絵本です。



不思議な世界を楽しもうと、言葉や間を大切に読んで読みました。すると子どもたちは、保育者の言葉を山びこのようにまねするようになり、隣の子と顔を見合わせ笑っていました。絵を見ながら、

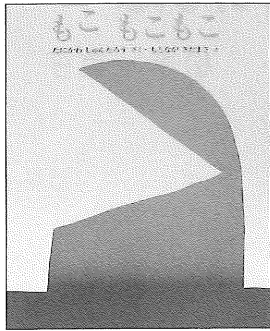
「また出てきた」

「太陽になったね」

など、思い思いにつぶやいている子もいました。

読み終わり、そつと絵本を閉じた後、「もこっ」と保育者が絵本のまねをして、体を動かしました。

すると「もこっ」と子どもたちは保育者のまねをしました。そんなやり取りはたちまち保育室の雰囲気を変え、「もこっもこっ」と言いながら、動き始めました。ちょうどその日は公開保育の日でしたので周り



には大人が大勢いましたが、温かいまなざしを受け、楽しく動き回る子どもたち。あちらこちらに行くと、友達と顔を見合わせながら跳んでいる子、席で小さく体を動かす子など、さまざまな姿を見ていました。保育者が「帰っておいで」と呼びかけ、「おかえり」と一人ひとりの肩をなでて、この遊びは終わりました。「もこもこ」は、音の響きを体で感じながら、先生や友達のそばで動くことがとっても楽しくなる、愉快的音になりました。

絵本から広がる子どもたちの豊かな体の動きやつぶやきは、保育者の想像をはるかに超えています。どんな世界でも自分の楽しみに変えてしまう子どもたちをうらやましく思います。素朴な音やリズムを楽しむ、そして、読み聞かせの面白さを一緒に味わった出来事でした。

(東京学芸大学附属幼稚園 小金井園舎教諭)

園長のまなざし

第8回

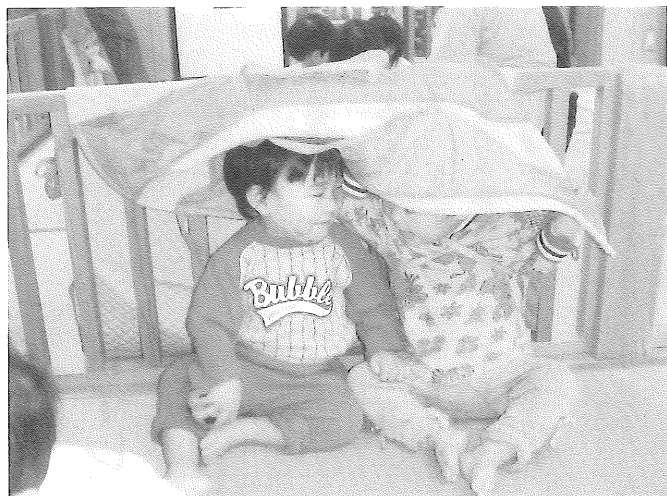
かわいい かくれんぼ

松永 克子

一歳五か月のＹちゃんが、「おいで、おいで」と手招きをして、かくれんぼが始まります。「かくれんぼ」といっても身体は丸見えで隠れているつもりなのです。

事の始まりは、部屋のちよつとしたくぼみのコーナーに私が隠れて、「かくれんぼしよう」。そうしよう。もういいかい。まあだよ」と歌いながら遊びに誘い、くぼみから顔をのぞかせると、大うけでみんなが寄って来て隠れました。そんな遊びを何度か繰り返しているうちに、Ｙちゃんが、自発的に「おいで」と手招きをしてお友達を呼んだのです。Ｙちゃんのクラス担任と私はほほ笑みながら見守っていると、なんと！Ｙちゃんの誘いで数名の子が、かくれんぼを始めたのです。絵本置きのタペストリーに無理やり隠れる子もいました。

Ｙちゃんは四姉妹の末っ子で、お家でもたくさんお姉さんたちに遊んでもらっているのです、友達とのつな



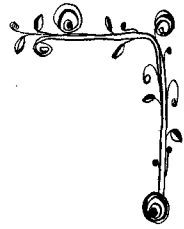
がりを求めるタイプでした。しかし何よりも担任は、
○歳児のころから仲間づくりを意識して保育にあたってきたのです。

思えば入園当初は、這い這いやつかまり立ちの子、
ようやく歩き始めたばかりの子どもたちが、歩行の完
成と共に、行動する自由をさらに広げ、仲間遊びに転
じたのです。

こんなこともありました。Mちゃんが散歩のジャ
ケットを着るのを嫌がり、だだをこねて、畳にひっく
り返って激しく泣いていました。担任が、立ち直れる
よう働き掛けていると、一歳四か月のAちゃんが寄っ
てきて、Mちゃんの肩をポンとたたきました。すると
どうでしょう、Mちゃんはケロリと泣き止んで、散歩
のジャケットを保育者に着せてもらったのです。

赤ちゃんだって、すごい力をもっていて、仲間と共
感し、愉快な、素敵な仲間と響きあう事ができるので
す。赤ちゃん時代を謳歌してほしいと思います。

(こぐま保育所園長)



発達心理学者の子育て奮戦記 (8)

トイトトレーニング

長田 瑞恵

娘と息子の共通点

わが家の二人の子どもたちは、外見はあまり似ていません。第一子の娘は小柄ですが、第二子の息子は堂々とした体格です。娘は生まれた時から髪の毛が豊かですが、息子は六か月を過ぎても、いまだに産毛程度しかありません。

このように、見た目はかなり異なる二人ですが、似ているところもあります。たとえば、声は母親の

私でも時々間違えるほど似ています。そして、何よりも似ていると思うのは、娘と息子の排泄に関する反応です。

娘は新生児のころから、オムツが少し濡れただけでも泣きました。息子はさらに敏感で、よく見ないとわからない程度しかオムツが濡れていなくても、急に不機嫌になり泣きだします。時には、オムツは全く濡れていないのに泣き出し、どうしたのだろうと思ってオムツをあげた瞬間に、シャーッと噴水の

ように排尿することもあります。最近の紙オムツは品質が良く、数回分の尿を吸収しても濡れた感じは少ないというのですが、娘や息子の場合は、どうも排泄の感覚そのものが不快であるようです。

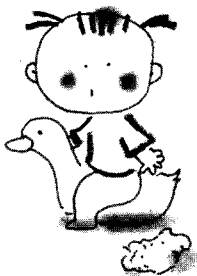
オムツはずれの条件

二、三歳児の母親の悩みとしてよく耳にするものに、「オムツはずれ（トイレトレーニング）」があります。娘の通う保育園でも、二歳を過ぎた子どもは保護者の間でよく話題に上ります。そこで聞かれるのは「なかなか自分からトイレと言えない」「トイレに行けるようになったと思ったら、また、行かなくなつた」というような「うまくいかない」という声です。

「オムツはずれ」がうまくいくためには、いくつかの条件があるとされています。一つは身体的な成熟で、歩けるようになっていいることと、膀胱がある

程度大きくなり、尿をためておけるようになることが必要です。もう一つは知的な発達で、尿意を言葉で伝えられることが必要です。

娘は新生児のころから濡れたオムツを大変嫌がりましたので、私も夫も、娘のオムツは簡単にはずれるかもしれないと安易に考えておりました。実際、先ほど挙げた条件がそろってきた一歳四か月のころには、娘はオムツが濡れると替えてくれというしぐさをするようになりました。そこで試しにオマルに座らせてみると、いとも簡単に排尿に成功したのでした。その後も、たとえ、オマルに座るのが間に合



わなくても、排尿直後に「した」「する」などと言
いながら、オマルへ向かっていくことが増えまし
た。オマルで成功すると、本人もとてもうれしそ
うでしたので、このままスムーズにオムツがはずれる
かもしれないと期待は膨らみました。

しかし、やはり事はそんなに簡単ではありません
でした。オマルの導入は、長い長いトイレトレーニ
ングの始まりだったのです。

未知との遭遇

娘のオマルへの興味は長続きしませんでした。し
ばらくは、気が向くと父母の誘いに乗ってオマルに
座っていたのですが、しだいにオマルを避けるよう
になり、一歳半ごろには全くオマルへ行かなくなり
ました。

最初のうちはのんびり構えていた私も、状況が改
善しないまま一歳九か月になり、そろそろ本腰を入

れようと考えるようになりました。

そこで、保育園の先生方に保育園での娘の様子を
尋ねると、娘がオマルを避けるようになった思いが
けない理由が明らかにされました。先生方がオマル
への誘いかけを始めたころのある日、オマルに座つ
た娘は、排尿だけでなく、排便にも成功したそうで
す。ところが、娘は初めて見るオマルの中の自分の
便にたいそう驚いてしまい、それ以来、オマルに座
ることを拒否するようになったというのです。

私はおかしいような、困ったような、でも、妙に
納得できるような、複雑な気持ちになりました。大
人にとって排泄は生活の中のごく一部であり、もは
や、取り立てて考えるような大事ではありません。
しかし、幼い娘にとっては、自分の便を初めてまじ
まじと見つめた経験は、強烈だったのかもしれないま
じ。自分の体から出てきた異物は、不思議を通り越
して、恐怖にも似た感情を娘に呼び起こしたのかも

「かったのか、少し緊張した面持ちながらも布パンツをはき、私の言葉にうなずきました。」

ところが、布パンツをはかせても、娘は排尿の前に尿意を伝えることができませんでした。

「いいよ、ちよつと失敗しちゃったね。でも、今度は頑張ろうね。」

濡れた布パンツを着替えさせながら、私は娘を励まし続けました。しかし、失敗するたびに、娘のやる気がしぼんでいくのがはつきりとわかりました。

そして最後には、「もう布パンツ、はかない、紙パンツがいい」と言い出してしまいました。

私は性急すぎたことを反省しました。弟の誕生に動揺して赤ちゃん返りをしている娘は、身体的・知的には十分に成長していても、まだ気持ちの準備が整っていないようでした。また、励まされてもうまくできなかったことに娘はひどく自尊心が傷ついたらしく、その後またしばらく、トイレもオマルも拒

否するようになってしまいました。子どもとの関係の中で励ましは大切なことでも、時としてそれがプレッシャーになってしまうのだと痛感しながら、私は布パンツを洗ってタンスにしまいました。そしてまた、機が熟すのを待つことにしました。

一進一退

娘が二歳八か月のころに、ちよつとした転機が訪れました。いつものように、私が娘と息子の二人を寝かしつけていた時のことです。息子がぐずりだすと、見計らったように娘が「ちゅちゅ、出る」と言い出したのです。弟に注意を向けがちな母親の気を引くための、娘なりの策略なのでしょう。私は娘の悪知恵に少し困惑しましたが、このチャンスを利用しない手はありません。すぐに「トイレですれば？」と私が誘うと、娘は「うん」と言っていそいそとトイレに向かっていきました。私が娘とトイレに行っ

ている間、かわいそうな息子は布団の中で泣いたままですが、致し方ありません。息子には少しの間我慢してもらい、娘がうまくトイレで排尿できると、娘を褒めちぎりました。次の日も、息子がぐずりだすと、娘はすぐに「ちゅちゅ」と言い出し、私はまた泣いている息子をしばらく待たせて、娘をトイレへと連れて行きました。

このように、就寝前にトイレに行くようになったので、日中にもトイレに行くようにしたいと考えた私は、成功が目に見える形でわかるように、トイレで排尿できたら、カレンダーにシールを一枚貼ることを提案しました。シール貼りの大好きな娘はすぐにやる気になり、しだいに日中でも自分からトイレに行くと言えるようになっていきました。

二歳十一か月になる今では、娘の機嫌がよい時は、ほとんど失敗せずにトイレで排尿できるようになりました。しかし、遊びに夢中になりすぎると、

間に合わないこともありますし、機嫌が悪い時には確信犯的に失敗します。また、布パンツでの失敗がよほど根深いのか、いまだに布パンツを嫌がりません。オマルの中の便を見たショックもなかなか癒えなかったようで、トイレでの排便は断固拒否していましたが、最近になってようやくトイレに行く気が出てきました。

トイレトレーニングは、オムツに制限されないという物理的な自律だけでなく、自分自身の体を自分でコントロールできるといふ心理的な自律を意味します。そしてそれがやがて、娘がいろいろな場面で自信をもって、自律的に生きていくための力につながっていきます。今は一進一退を繰り返しているような状態ですが、娘の身体的、知的な発達だけでなく、気持ちの準備が整うのを気長に待ち続けたいと思います。

子ども文化の詩学 (4)

遊び食べの体験

— 駄菓子文化が指示するもの —

森下みさ子

◆ 食べることと駄菓子

色とりどりのゼリー、ビーンズにザラ玉、紅色が鮮やかなさくら大根、口の中ではじけるわたパチにぶつとびチョコ、豆粒のように小さいプチ餅、それらしいにおいと味のビッグカツに蒲焼さん、

かさが多くて、得した気分になれるボン菓子にぶ菓子、大人を気取ったココアシガレットにパイプチョコ……。 「思い出の菓子」というと、世代を超えて、次々と拳がってくる駄菓子の数々。 「あれがあった」「これがあった」「こんなふうにして食べた」「クジが当たった」「店のおばさんにまけ



てもらった」「食べ過ぎて、親にしかられた」など、駄菓子について聞くと、その色や形や匂いや味と共に、遊びながら食べた思い出までがふつふつとよみがえってくるようだ。子ども時代のいつときと強く結びつき、子ども時代を彷彿とさせてくれる駄菓子とは、いったい子どもにとつてどのような魅力をもった食べ物なのだろうか。

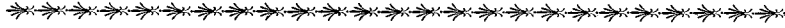
そもそも「食べる」ということは、生命の維持に必要な不可欠なことであり、「食べ物」は、大人から子どもへと、ほぼ一方的に与えられるものである。それはまもなく「食事」という社会的なルールや文化的な彩りの中に調えられていくが、それもみな、大人から授けられ、教えられて身につける、美意識や価値観を伴った作法であり、行為である。子どもの生命や生育に欠かせないだけでなく、その子が所属する社会や文化に深くかかわるものだから、与え手であり教え手である大人のこ

ントロール下に置かれるのは当然のことだろう。

お菓子にしても同様である。食事の間に与えられる軽食は、重すぎないように、甘すぎないように、栄養や衛生も考えた上で、手作りされたり選ばれたりして、子どもの口に入る。一日二食だった時代に、お腹が空きやすい子どもたち用の間食として発展してきたのが「おやつ」であったことを考えると、食事に比べれば子ども向けに用意されているとはいえ、大人のコントロール下にあることに変わりはない。むしろ、子どものために調えられるお菓子は、愛情に満ちた温かさや安心に包まれているといえる。その一方、駄菓子は同じ菓子類でありながら、まったく異なる要素によって作り上げられている。

◆駄菓子の世界を彩るもの

現在に至るまで、比較的継続して売られている



駄菓子为例に、特色をまとめると次のようになるだろう。(例に挙げた駄菓子はほかの特色も併せ持っている。)

①色づけが鮮やかなもの

寒天菓子、ゼリービーンズ、ザラ玉、さくら餅

②極端に小さいもの

モロッコヨーグル、プチ餅、プチプリン、ヤン

グドーナッツ

③外見と中身がずれているもの

ぶくぶくたい焼き(チョココレート)

ピンラムネ(モナカと砂糖菓子)

プチプリン(チョココレート)

ガムめん(麵状のガム)

④本物らしい着色・香りがつけられているもの

ビッグカツ、蒲焼さん、酢だこさん太郎、うま

い棒各種、ベビースターラーメン

⑤大人用を模したもの

ココアシガレット、パイプチョコ(たばこ)

ワルガキビール(溶かすとビール状になる)

ジャックポーナスチョコ(老万円札の外装)

ソーシン(頭痛薬のもじり)

プチリングキャンデー(指輪状の飴)

⑥おもちゃと合体しているもの

フェラムネ、まけんグミ、ネリアメ、型抜き

⑦クジ付き、あて物

糸引きあめ、よつちゃんイカ、プチプチうらな

い

⑧刺激が強い、口に残るもの

わたパチ、ぶつとびチョコ、わさびのり、アカ

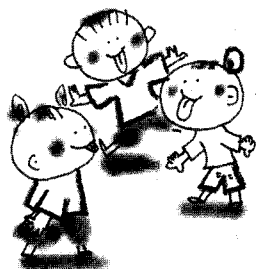
ベークロペー、超すっぱキャンデー

⑨昔なつかしいもの

きびだんご、きなこ棒、ぼんたん飴、カルメ焼

き、ふ菓子、タマゴボーロ、あんこ玉、ザラ玉

以上の特色が指し示していることは、駄菓子が



通常の食べ物・食事の価値観からことごとく逸脱していること、また、友達と遊びながら食べることを意図していることであろう。食欲をそそる自然な色や、食べやすい形や、大きさが崩されている(①②)のはもちろんのこと、栄養や健康とは無関係、通常の食の感覚からは、否定されるに違いない偽装やまがい物(③④⑤)が、むしろ、積極的に用いられている。遊びながら食べることは、通常の食事では禁じられているが、クジを引いたり、アタリハズレに沸いたり(⑦)、真っ赤に染まった舌を見せ合っては、刺激的な味を楽しんだり(⑧)、ジャンケンや型抜きを競ったりする(⑥)ことは、駄菓子には欠かせない

「遊び食べ」の要素である。しかもそれは、駄菓子が売られているその場で、そこにいる子ども同士で行われ、駄菓子屋の店主のほかは、大人の介在は一切ない。大人が調える通常の食事とは正反対ともいえる体験なのである。

◆駄菓子体験が意味するもの

〈食育〉の価値観からすれば無意味とも思えるこの体験を、実は、かなり多くの人が記憶に留めている。現今の大学生(十八〜二十三歳)二百八名を対象にアンケート調査を行ったところ、二百六名が駄菓子を買ったことがあった。そのうち最もよく食べていた時期は「小学校低学年」(百十名)に集中しており、週に一〜三回ぐらいは、子ども同士(九十一名)で買いに行っている。この体験の頻度が指示するところは大きい。昨今、子ども文化に定着した携帯ゲームやカードゲームを

含めても、これほどまでに子ども時代に共有されている体験はないと思われる。しかも、この体験はわずかながらもお小遣いを与えられ、子どもたちだけで近所に買物に行くことが許されるようになった年齢にほぼ限られているのだ。子どもたちは手にしたお金で自分が欲しいお菓子を自分で選び、目で見て遊び、手でいじって遊び、口に入れて遊び、友だちとクジのアタリハズレや刺激的な味についてしゃべり、色のついた舌を見せ合っていて、さらに遊ぶ。子ども時代の「この時」とばかりに集中して行われる体験なのである。

駄菓子屋での体験は、子どもの経済感覚を育てるとか、子ども同士の社会性をはぐくむとか、そこに課外の教育的効果を認める向きもある。確かに駄菓子屋体験は、口にする物を選ぶことを通して、親の保護から抜け出て、子どもだけのテリトリーを作り出す貴重な体験ともいえるだろう。駄

菓子の黄金時代といわれた一九五〇年代は、まだ、有害色素や不衛生な売り方が懸念される時代だったが、一九六〇年代も末を過ぎると「子どものオアシス」とか「(子どもが)自分で買える魅力」とか「小遣いで何種類も、おもちゃにもなる」など、むしろ、現代社会にあって、駄菓子屋の存在を珍重する扱いに変わってきている。有害物質や衛生観念にも目が配られるようになり、課外教育的な意義や懐かしさにも、焦点が当てられるようになって、駄菓子体験が評価され始めたといえるだろう。その経緯が、現大学生のほとんどが駄菓子体験を通過してくるといふ結果に結びついたに違いない。

しかし、ここで忘れてならないのは、これら教育的な意義を超えて、子どもたちを魅了してやまない駄菓子の力である。それは、必ずしも大人に認められやすい意味ではない。それどころか、大

人の目を逃れて子どもたちだけで行われ、大人が指し示す〈食〉の価値観を覆すように行われる、駄菓子と子どもたちとの間でのみ交わされる、密約に基づいた意味といってもよい。鮮やかな色やうそっぽい味や、当て物やまがい物を遊びながら食べるといふ食べ物とのかかわりに、大人はなんら意味を見出せない。しかし、子どもにとつては、その無意味こそが意味として輝いているに違いない。この連載の意図に即しているなら、子どもも感覚に共鳴する「詩的作用」としての意味といえるだろう。

大人の目をかいくぐって、子どもたちだけが共有する、遊びに満ち満ちた駄菓子の世界、通常の〈食〉の文法をはずしたところに生まれる詩的な世界が、世代を超えて、子ども時代のいつときを彩ってきたと思われる。新しく案出された駄菓子に混じって、昔なつかしい駄菓子が健在(⑨)で

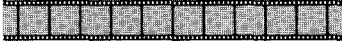
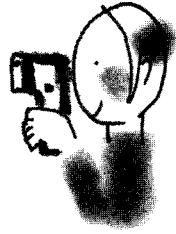
あるのも、各世代を通じて「子ども世界の詩的体験」が共有され、継承されてきたからではないだろうか。子ども時代のいつとき、大人の目からそれたところで、子どもであることの証のように体験される駄菓子体験に、私たちの文化は無意味の意味を感じ取ってきたのかもしれない。そうであるとするなら、昔ながらの駄菓子屋は激減したとしても、子どもたちの占有地として「遊び食べ」ができる場が、こっそりと、したたかに在り続けしてほしいと思うのは、私だけではないだろう。

(白百合女子大学准教授)

注

1 二〇〇七年六月に都内の大学と埼玉県の大学で合計二百八名を対象に行った「駄菓子体験アンケート」の結果の一部を引用。

2 一九六九年から一九八二年までの朝日新聞記事の見出しから抜粋。



保育の中の物語(8)

ゆるやかな境界線

↓ 降園前の遊びから考えたこと ↓

岸井慶子

昼食後の五歳児。U子とI子が保育室で楽器遊びを始めた。ベルが二本とスズが二つ。そして机の上にはタンバリン。「ドドソソララソ……、あっ、間違えた、もう一度」一音階ごとに楽器を変えている。実に楽しそうな表情だ。

同じ室内では、四々五人の女兒がカセットで音楽をかけ、歌ったり合奏したりしていたが、M子とS子が残った。M子はミュージックケルを目の前にずらりと並べ、一人で演奏することに夢中だ。背後から聞こえるU子らの楽しそうな声が邪魔になるらしい。そのたびに「ん、もうっ」とU子らのほうを振り返ってにらみつける。U子らはそのことに気づき、声を低くする。しかし、ついつい大きな音や笑い声をあげてしまう。すると、M子は席を立って、U子たちの



所へ行き「大きな音を出さないで」と言う。U子、I子は黙ってうなずく。

少しして、今度はU子がM子の所に行き、「ねえねえMちゃん、小さい声で歌うからいいかな。このくらいの声ならいい？」と遠慮がちに聞く。M子は座ったまま「そうね」と当然のように応じ、胸を手で押さえながら「心の中で歌ってよ」と言う。U子は「わかった」と言い大きくうなずく（ここで筆者は「そんな、M子は自分勝手ではないか。なぜU子たちは遠慮するの」と思う）。

そのとき、近くで紙剣を作っていたA男が「そんなの、無理でしょ。できないかもしれないよ」ときっぱり言う（そのとおり。よくぞ言ってくれたA君。違うことをしていても、ちゃんと聞いているのね）。しかし、U子は何事もなかったかのように自分たちの場所に戻り、I子と合奏を始める。M子も再びベルに向かう（あれあれ、なんで無視したの。A君の存在感は薄いのかしら）。

その後、U子とI子が「もつとベルを貸してほしい。Mちゃんばかりたくさん使っているけれど、私たちも使いたい」とM子たちに抗議するが、M子は全く譲らない。初めの仲間も戻り、担任と一緒に話し合った。五歳児らしい、いろいろな「理由」「条件」「経過説明」が出て「三曲終わったら貸す」というところにやっと落ち着いた。

さて、その三曲の最後の一曲を何にするか決めかねているその時、例のA男



がふーっとその輪に入ってくる。前から参加していたかのように「デンジマン（注テレビアニメ主題歌）がいいよ。おれ、デンジマン、好きなんだよなあ」と身体をくねらせながら大きな声で言う。いかにも「好きなんだなあ」と感じさせるA男の希望は、すんなり受け入れられた。「デンジマン」の曲の順番がくるまで、A男は合奏の仲間に入る。いよいよ曲がかかると、A男は踊りだす。夢中になって、しだいに回りが見えなくなるように「なりきって」踊る。その表情からは「恍惚^{こうこつ}」状態さえ感じられる。女兒たちも一緒にリズムを取ったり、歌ったりして楽しんでいる。動きはテレビなどの映像から覚えたのだから、デンジマン自身の動きとは左右逆転、鏡の関係（この真剣さがたまらない）。デンジマンの曲が流れると、室内にいたほかの男児もそろそろと集まってくる。興味があるのだろう。女兒だけの楽器遊びにいつの間にか男児が参加した。境界線を越えて流れ出す「音」のもつ特性を感じる。積み木や楽器のように、使っている子どももの使用権が明確な「物」とは違う特性だ。「遊びの伝播」を遊びの「質」から検討してみたくなる。

S子に焦点を当ててみよう。S子はこの一連の流れの間、何度も何度もベルに手を伸ばし、奏でようとするがかなわない。M子と同じグループにいるのだが、S子に許されているのはタンバリンのみ。M子が後ろを向いたり、席を離



れたりする時（たとえば、U子たちにもう少し声を小さくしてほしいと言いに
行く時など）、S子は急いでM子の使っているベルに手を伸ばす。時には手に
持つが、すぐにM子から取り戻される。担任がそばにきた時は少々抵抗し、す
ぐには返さない。しかし結局は、M子のやさしいけれど、強引な態度で取り返
されてしまう。では、S子はやってみたいベルを手に入れようと、涙ぐましい
努力をしているけなげでかわいそうな女児なのだろうか。一度もベルを奏でる
ことができない子なのだろうか（筆者は初め、そう思っていた）。ここで取り上
げた昼食後の時間帯ではそうだ。しかし、VTRによれば午前中、S子は一人
で思い切りベルを独り占めして奏でていた。

M子についても考えてみよう。M子は「ドレミの歌」を奏でようと真剣に試
行錯誤していた。ベルの持ち方や置き方を変えて、音程の違いを確認している。
筆者は初め、M子の「独り占め」や「強引さ」に注目したが、M子にとって、
ベルは音階全部がそろっていなければ意味をなさない。

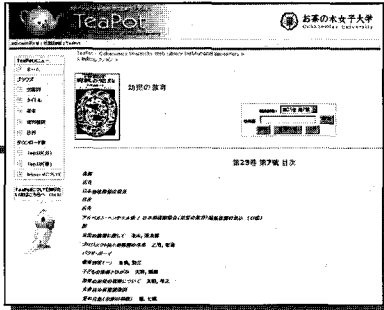
それぞれの物語が交差する降園前のひと時。その子の思いや、それまでの流
れ、観察者自身の思いによって、物語の意味が変わることに気づかされた。ま
た、活動と活動、仲間とそれ以外、私の物と人の物、などの「境界線」の緩や
かさについて考えさせられた事例だ。

（鎌倉女子大学短期大学部教授）

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (8)

『幼児の教育』を通してみる 保育者の実践研究の歩み

小山みずえ



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション (略称TeaPot)」にてバックナンバーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼ はじめに

私は、今日に至る日本の幼児教育がいかに形成されたのかということに関心を抱き、これまでに明治期から昭和初期における幼稚園教育実践の展開を、保育者による保育内容・方法改革との関連において検討してきました。『幼児の教育』には、専門家による論説のみならず、保育資料、実践記録、調査・研究の報告、大会記事、保育会の活動記録などが掲載されており、それらはその時代の保育者たちがどのような思いで保育に携わり、いかなる保育実践を展開させてきたのかわかる上での重要な手掛かりです。掲載された記事のみで保育実践の全体像を描き出すことには限界があるとはいえ、本誌がネット上に公開され、興味のある記事を簡単に閲覧できるようになったことは、今後の幼児教育史研究の進展に、大きく寄与するものと思われ

ます。

『幼児の教育（婦人と子ども）』を創刊号から通読して強く感じるのは、当時の保育者たちが幼児教育の改善・発達に向けて活発な研究活動を展開させていたという事です。今回、本誌に掲載された実践関係資料を確認するため、絞込み検索で「著者」に「幼稚園」という語を含む記事を検索したところ、一二七件の記事がヒットしました。その中には、自然保育の記録、科学的調査・研究の報告、新しい保育内容・方法の紹介などがみられます。

そこで以下では、こうした保育者たちによる保育内容・方法の改善をめぐる動きを追いながら、ネット公開された『幼児の教育』の利用について考えてみたいと思います。

▼自然保育の普及

各地の幼稚園から寄せられた保育記録の中で特に目立つのが、自然保育に関する記事です。前述の検索結

果と合わせて、「園外保育」「林間」「自然」「観察」といったキーワードのもとで、実践関係資料をさらに詳しく検索すると、五〇件程度の記事をピックアップすることが出来ます。それによれば、大正・昭和初期には、園外保育と共に林間保育が盛んに行われており、神戸幼稚園による「夏期林間保育実施報告」（第十七巻第十号 一九一七年一〇月発行）がその最も早い例とみられます。林間保育は、一九二〇（大正九）三（昭和六）年にかけて各地の幼稚園でも広く実施されており、都市生活の弊害を軽減し、幼児の健康を増進することが、当時の幼稚園教育の主要な課題であったことがうかがえます。

また、こうした園外での自然保育に関する記事と共に、自然物を素材とした遊びの記事も見出すことができます。とりわけ、江戸堀幼稚園の「自然物利用」は注目すべき実践であり、同園保母膳たけ（後に真規子と改名）から寄せられた次の記事の中では、幼児の巧

みな表現に学びつつ考案された、自然物玩具が紹介されています。

「自然物の利用（保育の實際）」

（第十二巻第七号 一九二二年七月発行）

「自然物の玩具に就て（一）」

（第二十八巻第十二号 一九二八年十二月発行）

「自然物の玩具に就て（二）」

（第二十九巻第一号 一九二九年一月発行）

「自然物利用の雛祭に就て」

（第二十九巻第二号 一九二九年二月発行）

「夏期休暇中に採集せし自然物に就て」

（第二十九巻第八号 一九二九年八月発行）

「秋の自然物梧桐の實及び其他の木の實の遊に就て」

（第三十一巻第九号 一九三二年九月発行）

さらに、「郡山市立郡山幼稚園の自然物應用手技に

就て」（第三十一巻第一号 一九三一年一月発行）と

題する記事には、江戸堀幼稚園の實踐に共鳴して自然

物の利用を試みたことが記されています。

このようにしてみると、大正期以降の保育現場では自然とのふれあいが重視され、幼稚園生活の中核に位置づけられていたことを確認することができます。従来から、幼稚園令における「観察」の制度化は、それまでの實踐を追認する形でなされたことが指摘されていますが、その実態をとらえることは非常に困難でした。しかし、こうした各地の幼稚園における取り組みを、ていねいに跡付けていくことで、「観察」の成立過程や、その後の展開が見えてくるのではないかと感じていきます。

▼幼児の発達への着目

次に、「調査」や「研究」というキーワードを入れて検索を行うと、現場の保育者たちが実施した調査・研究に関する記事が多数見つかりました。その一部を挙げれば、以下の通りです。

「空、風、雨、雷に關する幼兒の想像」静岡幼稚園

(第十二卷第五号 一九二二年五月発行)

「幼稚園一ノ組幼兒觀念界調査表」東京市阪本尋常小
學校附屬幼稚園

(第十二卷第六号 一九二二年六月発行)

「園兒繪畫觀察の様式 京都市保育研究会調査」

(第十六卷第七号 一九一六年七月発行)

「文字調査について」岡山市立五幼稚園

(第二十卷第三号 一九二〇年三月発行)

「幼兒の目測に關する研究」神戸幼稚園

(第二十五卷第五号 一九二五年七月発行)

「我が幼稚園に於ける訛言の調査」中村楠雄・和歌山
幼稚園

(第二十五卷第七号 一九二五年一〇月発行)

「幼兒の嗜好恐怖に關する調査」堀七藏・東京女子高
等師範學校附屬幼稚園

(第二十六卷第五号 一九二六年五月発行)

「幼兒の抽出検査」京都市保育會

(第二十八卷第二号 一九二八年二月発行)

「我が園に於ける群團テストの實際」東京市番町尋常
小學校附屬幼稚園

(第二十八卷第四号 一九二八年四月発行)

私は以前、神戸幼稚園を事例として、大正期の幼稚園教育における心理学の受容の影響について検討しましたが、今回の検査を通して、幼兒の心身の発達を調査・研究しようという動きが全国的にあつたことを、改めて確認することができました。

その内容を見ると、保育者たちが当時の最先端の理論を取り入れつつ、幼兒の実態の把握に努めていたことがわかります。たとえば、「園兒繪畫觀察の様式」は幼兒の精神を適当に指導するには、幼兒の觀察様式を知らなければならぬとの問題意識から、特定の絵画について、幼兒がどのような見方をするのかを調査したものです。現在から見れば、こうした調査・研究に

は方法上の限界があるように思われますが、日々の保育に追われながらも、保育者たちが幼児の実態を調査し、正確な幼児理解に基づいた保育方法の確立を目指していたことには、大きな意義を見出すことができま

▼幼児に適した内容をめくって

—「お話」を中心に—

「幼児の教育」には、童話作家、遊戯研究者、作曲家らの作品と共に、各地の幼稚園で生み出された保育材料が掲載されています。

今回、「お話」材料に注目し、「童話」「お伽話」「お話」「おはなし」といった関連するキーワードで検索してみると、「童話」一九二件、「お伽話」一六件、「お話」六八件、「おはなし」三三件がヒットしました（論説などを含む）。このうち、保育者から寄せられた作品を調べたところ、少なくとも四五件あることがわかり

ました。

これまでの研究では、大正期における「お話」の登場に注目し、従来の教訓主義的な談話材料が幼児を心から楽しませ、喜ばせるものへと変化する過程を検討してきましたが、そうした成果を踏まえた上で、今回の検索結果を見ると、一九二〇年代の作品のタイトルには、

「幼児にきかせるお話」お茶の水幼稚園

（第二十六卷第九号 一九二六年九月発行）

「幼児にきかせるお話 珊瑚のくびわ」新庄よしこ・

東京女子高等師範学校附属幼稚園

（第二十六卷第十号 一九二六年一〇月発行）

「星の子（幼児に聞かせるお話）」久門嘉祐・東洋幼稚

園牛込分園

（第二十七卷第七号 一九二七年七月発行）

「ライオンの赤ちゃん（幼稚園のお話）」久門嘉祐

（第二十七卷第十号 一九二七年一〇月発行）

「天狗の團扇（幼稚園のお話）」安間公観・岡崎市熱
岡幼稚園
(同右)

といったものがみられ、「幼児のためのお話」ということが前面に打ち出されているように感じられます。

特に附属幼稚園の作品は、①言葉遣いがやさしく、素朴な内容であること、②動物が主人公の話が多いこと、③擬態語や言葉のリズムが重視されていること、④反復形式が多用されていることなどを特徴としており、幼児の興味や発達への配慮が払われています。

さらに、一九三〇年代後半の記事を見ると、『幼児の教育』誌上で保育者に対して、「幼児童話」の懸賞募集が行われています。一九三五（昭和一〇）年から一九四一（昭和一六）年にかけて掲載された入選作品のみを数えても二十七作品あります。このように誌上を通じて、幼児の生活や地方色を取り入れた「お話」の創作が呼びかけられ、それに応じて保育者たちが創作を行っていたことは興味深いことと思います。

▼おわりに

本稿では戦前の資料を利用しながら、保育現場における保育内容・方法をめぐる動きについて述べてきましたが、歴史を通して形成された幼児教育の原理や実践形態などを今後に役立てていくためには、今日の問題を視野に入れながら検討することが不可欠です。今後、『幼児の教育』の記事が一九五〇年代以降についても順次公開されることは、日本の幼児教育の歴史を今日とのつながりにおいてとらえ、跡付けていく上で大きな意味のあることと思います。

他方、『幼児の教育』に掲載された記事は歴史的資料にとどまらず、今日の幼児教育を考える上でも重要な示唆を与えてくれるように思われます。本誌掲載の記事をネット上で容易に閲覧できるようになったことで、保育関係者にとって幼児教育の歴史がより身近なものになることを期待しています。（上智大学大学院生）



保育の現場から

子どもたちの心に目を向けて

白石 肇

三歳児の生活

「先生、まだ遊べる？」

四月、不安いっぱいに登園していた子どもたちも、六月になると、「もっと遊びたい」という気持ちがいっぱいになってきました。兵庫教育大学附属幼稚園には登園後から十時三十分くらいまで、自分の好きな遊びをする「うれしのタイム」という時間があります。教師は季節や時期によって、意図的に遊びの環境

を変化させます。また、一人ひとりの子どもが個性を発揮しながら遊ぶ場や、友達とのさまざまなやりとりをしながら仲間関係を築いていく場など、多くの経験や体験をしていけるようにという願いを込めて、遊びの場を作っています。

「うれしのタイム」で、三歳児の子どもたちは、保育室の南側にある園庭（南園庭）で遊ぶことが大好きです。その中でも、砂場は子どもたちに大人気の遊び場です。そこで、ごちそう作りをしたり、山や川を作っ

たり、穴を掘ったりして遊んでいます。ごちそう作りでは、「カレーできたよ」「うどんができました」「アイスもあるよ」と、お皿やお椀に盛った砂をいろいろな物に見立てています。「先生に見てほしい」「先生に食べてほしい」と、目をきらきら輝かせながら、思い思いのごちそうを見せてくれます。できたごちそうを教師が食べるのを見ると、うれしそうなお表情を見せて、再びごちそうを作ります。繰り返しごちそうを作ること、手で砂の感触を確かめながら遊ぶことが楽しいようです。また、自分の思いでいろいろな物に変身する「砂」に、繰り返し触れて遊ぶことで、心を落ち着かせ、じっくりと遊ぶ経験をしているようです。

さあ、水遊びをしよう

六月下旬となり、気温もどんどん上がり、水の心地よさを感じることができるようになりました。そこで砂、水に存分に触れて遊べるように、登園後、持ち物

の始末を済ませた子どもから、水着に着替えて遊べるようにしました。タライやペットボトルで作ったジョウロをたくさん準備しておき、南園庭で子どもたちと水を掛け合せて、思いっきり水遊びをしよう、私は楽しみにしていました。ところが、子どもたちはタライの周りに集まり、「うずまきができたよ」「メロンジュースができました」などと、水やり用の小さなペットボトルで水をすくったり、タライの中に水を流したりして遊び始めました。また、「水が速いね」「新幹線みたいだよ」「下(砂場)にどんどん水がたまっていくよ」と、砂場にある樋たがにカップで繰り返し水を流して遊んでいました。そして、遊びに夢中になると、ひざをつき、おしりをつき、手で水の感触を何度も確かめるように遊んでいました。この時、私と子どもたちになきなずれがあることに気づきました。私は水着になった子どもたちと全身で水の感触を楽しんで、水を掛け合せて遊ぶことを予想していました。しかし、子

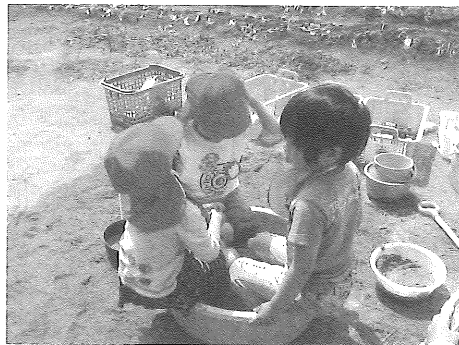
どもたちは、もっと自分の手や足で水に触れてみたい
と思っていたようです（これまでもタライの水を、
カップや水やり用の小さなペットボトルで、すくつた
り流したりして遊ぶ姿が見られました）。砂と同様、
自分の思いでいろいろな物に変身する「水」に触れて
遊ぶことに興味をもっていたのです。

翌日、タライや子どもの手に合う小さなカップ、ペッ
トボトルを増やしておきました。そして、私も子ども
たちと一緒に、水をすくつたり、流したりする遊びに
加わりました。「先生、ここにおいで」「こうやって
（水を）すくってごらん」「冷たくて気持ちいいでしょ
う?」「（水が）きらきらしているでしょう? きれい
だね」など、子どもたちは感じたことを口々に言いな
がら、水に触れて遊んでいました。そして、タライの
周りで遊んでいると「ちよつと足を入れてみよう」
「手でも水がすくえるよ」など、少しずつ、直接、身
体で水に触れてダイナミックに遊ぶ姿が見られるよう

になりました。

その後も、しばら
く、タライの周りで
の水遊びが続きまし
た。水を掛け合うの
ではなく、手足で水
の感触を確かめるよ
うに、カップなどで
水をすくつたり流し
たりする遊びをして

いました。入園当初、自分の好きな遊びをなかなか見
つけることができなかつたAさんも、タライの周りで
する水遊びが大好きになりました。小さなペットボト
ルで水をすくつては、タライの中に水を流すことを、
繰り返ししていました。また、ペットボトルが水に浮く
ことに気づくと、手で水をかいて「先生、見て見て。
船だよ」とうれしそうに声をかけてきました。「先



生、船を作る」と、製作コーナーでスチレン皿を見つけてくるなど、自分で興味のあることを見つけて遊ぶ姿も見られるようになりました。

Bさんは、入園当初、室内で遊ぶことが多く、教師が誘いかけても戸外で遊ぶことが少なかった子どもです。しかし、水遊びをきっかけに、戸外に出てくるようになりました。桶に水を繰り返して流すことに興味をもち、登園後、自分から戸外に出て遊ぶようになりました。一学期、砂や水にじつくりと触れ合って遊ぶことで、子どもたちは園生活に慣れて落ち着くだけでなく、自分の思いを出したり、ダイナミックに遊んだりするきっかけにもなっているようです。

プール開き

六月最終週、プール開きとなりました。園には横六メートル、縦八メートルの大きなプールがあります。

しかし、三歳児の子どもたちが、いきなりそのプール

で遊ぶと、恐怖心を抱くかもしれないので、まずは南園庭に簡易プールを出して遊ぶことにしました。

実際、簡易プールに入ってみると、水を怖がる子どもたちもいました。特に、顔にかかることを嫌がる子どもが多く、Aさんもその一人でした。そこで、水遊びで使っていた小さなカップやペットボトルを、以前作っておいたペットボトルジョウロに変えて、水遊びでしていたことを簡易プールの中でも行えるようにしました。また、簡易プールの中を歩いたり、ジャンプしたり、しゃがんだり、また、手で水をすくったり、水を身体に掛けたりしながら、少しずつ水に慣れて遊べるようにしました。水遊びの時、手足で水の感触を確かめるように遊んでいたように、簡易プールの中でも、身体全体で水の感触を確かめながら遊ぶ姿が見られるようになりました。水の中で手遊びをしたり、動いたりすることで、顔や頭にも自然と水が掛かるようになりました。



また、「先生に掛けていいよ」と、私めがけて思いつきり水を掛ける遊びも、子どもたちは大好きになりました。水を掛けるだけでなく、自分にも水が掛かる経験を遊びながらしていきました。Aさ

んも水を掛けて遊ぶことには興味をもち、喜んで私に水を掛けていました。

そして、私から子どもたちに水を掛ける遊びもしました。水への抵抗に個人差があるので、簡易プールの周りに並んでいる子どもたち一人ひとりに水を掛けました。「先生、顔に掛けていいよ」「背中とおしりだけにして」「顔を手で覆ったり、後ろ向きになつたりし

ながら）掛けてもいいよ」など、自分からどこに水を掛けてほしいのか、子どもたちはリクエストをしていました。Aさんは顔に掛かることは嫌がっていました。が、後ろ向きになってから、「掛けても）いいよ」と水を掛けられる経験もしました。簡易プールで遊ぶことで、最初のころ、水に抵抗をもっていた子どもたちも、少しずつ慣れていく姿が見られるようになりました。

大きなプールへ遊びに行こう！

七月になって、四、五歳児が大きなプールで遊ぶ様子を見て、「あっちのプールには行かないの？」と尋ねてくる子どもがいました。私から「みんなもあっちのプールで遊んでみる？」と声をかけると、多くの子どもたちは「行きたい」「遊びたい」という反応でした。Bさんも「行ってみたい」と喜んでいました。簡易プールである程度慣れた後は、大きなプールで遊ぶ計画を



していました。しかし、大きなプールに抵抗を示す幼児が出てくるのではないかと予想していたので、子どもたちが大きなプールでも楽しめるような活動を、考えておくことにしました。

水遊びの時、Aさんたちが楽しんでいたペットボトルを水に浮かべる遊びや、タライにストレッチ皿などを浮かべる遊びからヒントを得て、牛乳パックで大きなかだを作っておきました。そして広くて大きなプールに浮かべて、そこに乗って遊ぶことにしました。プールの中

に入ることを怖がっていた子どもたちも、教師と一緒にそのいかだに乗って遊ぶことができました。Aさんもちかだに乗ることは大好きで、プールのたびに「今日もいかだに乗りたい」と、教師に話していました。

水遊びを始めた六月下旬、子どもたちとのずれを感じてからは、「子どもたちは何を楽しんでいるのか」「どうしてこんなことをしているのか」と、目に見えるものの裏側に隠された子どもたちの心の中に、目を向けることを心掛けました。水遊びから、子どもたちはどんなことを楽しみ、どんな経験をしているのか、その実態から、プール遊びはどのように展開すべきなのか、子どもたちから学ばせてもらいました。今後、子どもたちの心に目を向けて、子どもの実態から保育を計画していけるようになりたいです。

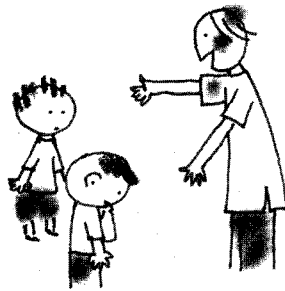
(元兵庫教育大学附属幼稚園・

現宝塚市立西山幼稚園教諭)

「わたしたち」のはすねっこ体験

～面白さと切なさのレッスン～

菊地知子



さながらの生に出会う

はすねっこボランティア実習

放課後クラブはすねっこ（以下、はすねっこ）は、東京都板橋区にある、障^{しょうがい}碍の子どものための学童クラブ、すなわち放課後や土曜日と長期休暇中の子どもたちの居場所である。地域に根ざしてはぐくまれている、学校と家庭とをつなぐ小さな小さな場で、通う子どもたちは小学生から高校生までと幅広い。^注

二〇〇八年度お茶の水女子大学発達臨床心理学講座一年生の必修授業「発達臨床基礎論Ⅱ」では、主に、夏休み中の午後二時から六時まで、学生が一人二回ずつ、はすねっこにボランティア実習に入らせてもらった。これは、二〇〇八年度からの新たな取り組みであると同時に、例年の引き続きとなる私立愛育養護学校（以下愛育）の一日実習と合わせ、学生たちが自ら身をもって子どもとの世界を生きる体験の、相補的な意味も込めた試みでもあった。

はずねっこにせよ愛育にせよ、そこでの体験は、大学の講義で得ていく知識や技術とは両立しにくい、理的判断や評価を保留にせざるを得ないような、いやおう無く身体ごと、そこに巻き込まれてしまうものになるであろうことが予想された。それをじっくりと味わってほしいとの思い、また、どこか遠くの知らないところにいる「わたし」と「誰か」の全く別々な物語ではなく、地続きの、まさに同じ時空間を共有しうる者同士である「わたしたち」の物語を紡いでほしい、という思いがあった。

深い思いのつづられた記録が次々届く

七月初旬の授業で、ボランティア実習のガイダンスを行った。はずねっこから来てくれた佐藤さんは、スライドを写しながら、子どもたちの様子、はずねっこ設立の経緯や、スタッフの思いなどを話してくれた。また、若いスタッフの石原さんからは、服装やおやつ

作りの手伝いについてなど、具体的な注意事項をきいた。次の回の授業では、教員自身が、はずねっこでの子どもとの体験から感じたことを、少しばかり話し、また、「はずねっこへのたどり着き方」という紙を配って、それに沿って、道順をていねいに説明もしておいた。

これらにより学生たちは、全く未知の場所であったはずねっこを多少なりともイメージし、また、スタッフの人柄に実際に触れて、訪問を楽しみにもできるようになったようだった。

かくして、学生たちのはずねっこ行きが始まる。夏の間、毎日のように学生からの記録がパソコンに届くようになった。

記録の中で、子どもと遊べて楽しかった、面白かった、2回目を楽しみ、ぜひまた行きたいなどとシンプルに語る者が多かったが、ただ陽気に楽しいというのではなく、どの学生のどの記録にも、読む者の気持ち

をグッと揺らさずにはおかないような、不思議な力、
思いの深さが感じられた。

わたしたちの授業では、実習や振り返りに限らず、
子どもあるいは人間を、単に操作や治療の対象として
理解しようとするのではなく、われも彼も弱きもの・
小さきものであり、かつ、主体として生きる存在とし
て、否定的でない関心をもって感じ考えていってほし
いと思っている。学生に対して、それをそのまま言葉
にして伝えることこそ、してはこなかったが、なんの
ことはない、彼女たちは、はずねっこ実習で、わが身
をもって、そのことに気づいてしまうような体験をし
てしまったのだった。切ない思いをさせているなあ、
と後悔や反省としてではなく、ただ心から思った。

「切ない」には、「①(寂しさ・悲しさ・恋しさなどで)
胸がしめつけられるような気持ちだ。つらくやるせな
い。②大切に思っている。深く心を寄せている」など
の意味がある(三省堂大辞林より)。その両方を含ん

だ思いを学生がしているように、記録を読んで私は感
じたのだった。

実習を楽しみにもしていたはずなのに、学生たちは
はずねっこの扉をたたく前には、まず、自分自身がそ
の場に本当に受け入れてもらえるのかと不安に思う。
そして、実際に子どもものそばにいる時も、受け入れて
もらえているのか、子どもが「私をよそ者として振る
舞っているように」、あるいは「私の存在は無い
かのようなそぶりを見せている」ように感じたり(「近
づいても」何度もするりとかわされてしまい、少しし
てまた近づいてみるのだが、かわされ続けて、戸惑っ
てしまった)人もあり、「(子どもが)手を振ってくれ
て、ああ仲間と想ってもらえた、とほっとした」とい
う学生もいた。また、つなごうとする手に爪をたてら
れ、「なぜだろう、と考えもせず、ただただ、痛くて、手
をつなぐ形に持ち込むことに必死」になるようなこと
もあった。

さらには、ほとんどの学生が、保育後のミーティングで感じることの多さ、考えさせられることの多さに触れていた。以下にその一部を載せる。

「ミーティングのときに、佐藤さんが、障碍をもった子どもたちであっても、普通の部分で付き合っていきたい、と言っていたことがとても印象に残っている。何かが起これば、子どもだって怒るし、だけどちゃんと説明すれば、理解して納得してくれる。そんなような、誰にとっても同じような部分で付き合っていきたいという思いに共感した」「子どもたちにはそれぞれ『すき間』や『あやうさ』などのテーマがあると話していました、子どもたちの視線の先や行動の感じなど、全身でのコミュニケーションの大切さを肌で感じる体験でした。(中略)はすねっこに行ってみて、もう丸一日がたちましたが、まだいろんなことが勝手にどんどん思い出されるほど、とても印象的で刺激的で楽しい体験をさせていただきました。……とても温か

く迎えてくださったお二人の佐藤先生、そして七人の柔らかくて、あつたかくて、一生懸命な子どもたちに感謝しています。」「その子と私で、積み木を壊れないように高く積みました。(中略)ミーティングで、その子はそれまで、積み木を横に並べることしかしなかったと聞いて、その子の『初めて』に出会えたと思つてとてもうれしかった」

振り返り・分かち合いの授業で

後期に入り、発達臨床基礎論Ⅱは発達臨床基礎演習Ⅱへと衣替えをし、担当教員のうち、塩崎・菊地は留任、浜口は柴坂に交替した。

わたしたちは、前期の大きな活動であった「はすねっこ実習」について、授業名や担当者が代わっても、しっかりとリフレクシヨンの時間をとりたいと考えていた。そして、後期初回ガイダンスの授業の翌週に、まずは、それまでに提出されたはすねっこの記録

を無記名にして打ち出し、一人に一人分ずつランダムに配り、自分の手元に配られたものをグループ内の人に読んで聞かせ合う、という活動をした。聞き合ったのちには、グループ内でそれぞれが思うところを述べて、授業最後に提出用紙に感想を書いた。

その翌週は、前週に出された感想すべてをコピーして全員に配り、目を通した後、前週のグループディスカッションと配布した感想を元に、一人ひとらずつ、感じたことを言葉にして伝え合った。見えないボール（空気のボール）をまずは、授業者から一人の学生に投げて（投げる真似をして）、それを受け取った人が発表をし、発表者からまた誰かにボールを投げて、受け取った人が次の発表者になる、という手順であった。

発表が進むうち、しだいに学生たちは、考え考え、たどたどしくではあるのだが、言葉が自分の内側から出てくるのを抑えきれない、という感じで語るようになっていた。この日、いちばん最後に「ボール」を受

け取った担当教員の柴坂は、「この二度目の振り返りの発表を受けて、どの人の話も、言葉がただ単に並べられた言葉ではなく、その背景に自分でしっかりと感じた思いや体験があるということが、言葉と言葉の間（見えないところ）から伝わってきた」と語った。そして、この日の授業後の感想用紙には、この柴坂のメッセージが、自分たちの思いにかなうものであったという感想を、多くの学生が記していた。

ここから始まる「他者と共に在ること」

複数の色の光が重なると、黒や闇や濁りがつくられるのでなく、無色とも透明とも呼べるような白い光になる、ということを知った子どもたち、私はいたく感嘆した。

「面白い」という語は、もともと、「面（おも）白し」で、目の前がぱっと明るくなる感じを表すのだという（三省堂大辞林による）。今回の実習とその後の振り返

りで、学生たちはそれぞれに、いろいろ違った色の光が重なり合うような体験をしたのではないかと、ふと思った。ペースになる実習での体験は、時に面倒で、時間がかかって、もどかしくて、不便で、カラカラと乾いて楽しいばかりではなかった。それでも、いや、だからこそ、いろいろな色の光が重なり、白い光になることで、何かにはっとして、目の前がぱっと明るくなるような、「面白」という体験に成り得たのではないか。学生たちは、スタッフの人たちに混ざって（混ぜてもらって）、子どもたちのことをあれこれ心配したり、困ったり、気持ちを寄せたりし、その中で、自分自身についても、立ち止まったり、戸惑ったり、うずくまったりしながら考えたのだと思う。

この実習を通して、学生たちが大学内では出会いたくない、現場の極上の大人に出会い、「保育」や「障がい」について共に感じ考える「輪」、あるいは「連なり」に加えてもらえたことへの感慨は深い。授業で教員が何

をどう語るより、はすねっこでの出会いを通して学生たちが育ったという実感がある。大学一年次の必修であるこの授業は、履修者の多くが、十八歳十九歳という非常に若い人たちである。はすねっこは、その若い人たちが、同じ空間で自分と地続きに、同じように主体として生きようとする障壁の子どもたち、また、そこを支えようとする大人たちに出会い、自分も受け止められていると感じることのできる場であった。自らの育ちも含んだ人の育ちに触れる人の輪が、そうしていく層にも重なってあるということに、切なくも面白い、面白くも切ない、保育の、あるいは人間学の学びの端緒が図らずも示されたように感じている。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師）

注 『幼児の教育』第一〇六巻第十号二〇〇七年十月発行

にはすねっこ代表の佐藤キミ男氏が「共に生きる」と題して、人の居場所としてのすねっこについて書かれている。

編集後記

8月号恒例の緑蔭図書紹介では、絵本あり、ドストエフスキーあり、また書かれた言葉だけでなく、読む人の声・リズムなどの環境や、時代の音楽性との関係にまで話が及び、胸ひろがる読後感だった。

一方、森下先生の駄菓子屋論。読んでいるうちに、踏切の脇にあった小さな「マイ駄菓子屋」体験が迫ってきた。銀色のチューブからクリーム状の甘いチョコをチューチューとすすっていると、母親に不衛生だ有毒だとさんざん言われたものだ。駄菓子屋の数は激減しているらしいが、大型スーパーの一角にはかなりの幅の駄菓子コーナーが今もあり、子どもが小銭を握って熱心に選ぶ姿がある。だがそこには、駄菓子屋を営む、本物の、しかしどこか不思議な大人とのやりとりはない。(H)

幼児の教育 第108巻 第8号

平成21年8月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集部 金子めぐみ
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社 フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円(本体524円)
©日本幼稚園協会 2009 Printed in Japan

表紙絵 ヨシエ
扉カット ヨシエ
扉題字 津守 眞
カット 田崎トシ子
編集委員 上坂元絵里
高橋陽子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

〈特集〉子どもと動き

宮丸凱史・栗原知子・柴坂寿子・宮里暁美

・ひととき 第2回 戸田奈津子

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開が始まりました！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。

明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。
ご意見ご感想などは、youjimap@yahoocopy.jpまでお寄せ下さい。

心を育てる環境教育シリーズ

大澤 力／編著

全3巻

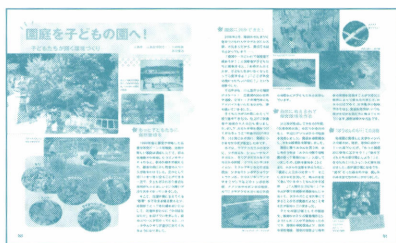
保育現場ですぐに役立つ実践事例と指導計画案を多数掲載。

「生活」「食育」「自然」の3つの観点から、幼児期の環境教育を提案します。

自然

③自然が育む子どもと未来

自然の美しさ、いのちの尊さを感じ取る感覚は、五感をフルに使った自然体験によって育まれていきます。子どもを取り巻く環境を見直し、自然とふれ合う保育を提案する幼児期の環境教育「自然」編。



●毎日の散歩で大活躍！ 四季のアイデア満載ハンディサイズの『わくわく自然体験ブック』（52ページ）付き！

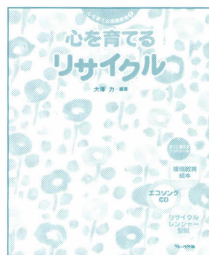


10213

26×21cm 132ページ 定価2,835円(税込)

生活

①心を育てるリサイクル



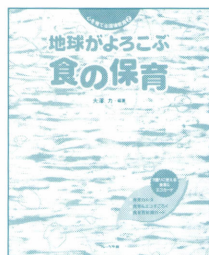
毎日の保育の中でできる楽しい活動を提案。

26×21cm
64ページ＋
環境教育絵本・型紙・CD

定価2,415円(税込)
10211

食育

②地球がよろこぶ食の保育



食の活動を通して環境とふれ合う実践を掲載。

26×21cm
112ページ＋
3通りに使える食育&
エコカード＋すごろく
定価2,625円(税込)

10212

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

「気になる子」にどう向き合うか

子育ての曲り角

藤永 保 / 著

子どもの輝く瞳でいっぱい社会へ

育児不安、養育不全、乳幼児虐待を未然に防ぐために

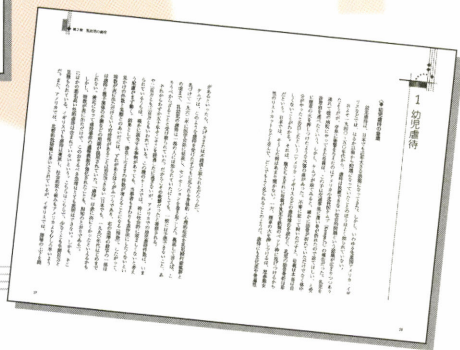


10740

急速に増加し、社会問題化しつつある乳幼児の虐待に30年以上前から取り組んできた著者の集大成の書。

虐待、養育放棄、養育不全を原因とする「気になる子」を発達障害と診断することの誤りを指摘し、子どもを見る目を育てるための提案。

21×15cm 308ページ 定価2,415円(税込)



目次

- はじめに ◆ 保育園の窓口から
- 第1部 子育ての曲り角と「気になる子」
- 第1章 ◆ 障害児 問題児 気になる子
- 第2章 ◆ 乳幼児の虐待
- 第3章 ◆ 養育放棄と養育不全

- 第2部 「気になる子」の事例と取り組み
- 第4章 ◆ 知能と社会性のほさま
- 第5章 ◆ 早発性の学業不振と無気力
- 第6章 ◆ 揺らぐ家族像
- 第7章 ◆ 早期養育の可能性
- おわりに ◆ まとめと補足

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。